

作文の部 教育長賞

「ふつう」ってなんだろう

東久留米市立下里中学校

二年 鈴木 辰宏

私たちの生活の中には「ふつう」という言葉があふれています。「ふつうはこうだよ。」「ふつうはできるでしょ。」「一見すると当たり前で便利な言葉に思えますが、私はこの言葉に何度も苦しめられてきました。

私は昔から勉強も運動も得意ではありません。テストでは平均点を下回ることも多く、漢字や計算の練習も時間がかかります。体育の授業では逆上がりができず、持久走も遅い方でした。そんな私に向かって「ふつうはもっととできるよ。」と言われることがあります。そのたびに心の中で「じゃあ自分もふつうじゃないのかな」と思い込み、情けなさや悔しさでいっぱいになったのを覚えていません。

あるとき、宿題を忘れてしまった私は先生

に「ふつうは忘れない。」と言われました。  
友達からも「ふつうは逆上がりできるよ。」  
と笑われたことがあります。もちろん先生や  
友達に悪気はなかったのかもしれないが、  
その言葉は私を「みんなと違う劣った存在」  
と感じさせました。私は「ふつう」にできな  
い自分が間違っているのではないかと悩み続  
けました。

しかし、中学校に入って人権について学ぶ  
中で、「ふつう」という言葉の裏には危険も  
あると知りました。人権とは、誰もが自分ら  
しく生きる権利のことです。けれども「ふつ  
う」を基準にしてしまうと、それに当てはま  
らない人を「おかしい」「間違っている」と  
決めつけ、知らないうちに傷つけてしまうこ  
とがあります。私自身がそうでした。相手に  
とっては何気ない一言でも、言われた側にと  
っては深い傷になることがあるのです。

世界を見ても、「ふつう」は一つではあり  
ません。日本では左側通行がふつうですが、

外国では右側通行がふつうです。日本ではお米が主食ですが、パンかパスタを主食とする国もあります。つまり「ふつう」とはその環境や文化によって変わるもので、絶対的なものではないのです。勉強や運動についても同じことが言えると思います。

私にとっての「ふつう」は、テストで満点を取ることでではなく、昨日より一問多く解けるようになることです。逆上がりができなくても、縄跳びを一回多く跳べるようになること。それが私の「ふつう」であり、成長の証なのです。得意な人にとっては簡単なことでも、苦手な人にとっては大きな一歩です。それを誰かと比べて「ふつうじゃない」と切り捨ててしまうのは、とてももったいないことだと思います。

私はこれまで、勉強も運動もできない自分に自信を持てませんでした。けれども今は少しずつ考え方が変わってきました。苦手なところがあるのは当たり前前で、それは恥ずかしい

ことではありません。それぞれの人が自分なりの「ふつう」を持っていていいし、その違いこそが人と人とを豊かにつないでいるのだと思います。

人権を大切にするといいことは、誰かを一つ「ふつう」に押し込めることではなく、一人ひとりの違いを尊重することです。「ふつう」を理由に他人を否定するのではなく、「それもその人のあたりまえなんだ」と認め合うことが、みんなが安心して過ごせる社会につながると思います。

これからも私は勉強か運動で苦勞すると思います。それでも「ふつうはできるのに」と自分を責めるのではなく、「自分なりのふつう」を大事にしていきたいです。そして同じように悩んでいる人を見つけたら、「それでも大丈夫だよ。」と声をかけられる人になりたいです。

「ふつうってなんだろう。」その答えは人の数だけあります。誰かの「ふつう」を押し

つけるのではなく、お互いの「ふつう」を尊  
重し合うこと。それこそが大切な「ふつう」  
なのだ、私はこれからも考えていきたいで  
す。

